

## 1 学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究

研究代表者 下田 好行（初等中等教育研究部 総括研究官）

### ①研究の趣旨，ねらい

今、学力向上が叫ばれている。しかし、学力向上の前に児童生徒の学習意欲の喚起のほうが先決問題である。児童生徒がその気にならなければ、結局学力は定着しないからである。ゆえに、児童生徒の学習意欲を喚起させるような学習指導法、教材開発が重要になってくるのである。また現在、中教審教育課程部会『第3期教育課程部会の審議状況について』において、「習得型・活用型・探求型の教育」が示されている。しかし、こうした教育は方向性としては示されているが、具体的な中身がまだない。そこでこの研究では、児童生徒の学習意欲を喚起させるような「活用型・探求型の教育」の教材開発の枠組みを開発し、学校現場の授業実践を通して検証することを目的とした。

### ②研究成果の概要

#### ○学力調査と学習意欲の喚起 —今、学力調査から見えてくるもの—

PISA 学習到達度調査 2003 年からは、日本の学力の国際比較の順位よりも重要な課題が垣間見られた。それは日本の児童生徒が「今学んでいる学習の内容が将来役に立つか分からない、学習に対して自信がない」という問題であった。

#### ○OECD の「キー・コンピテンシー」と「知識・技能を実生活に活用する力」

—今、どのような学力が求められているのか—

知識・技術の教授という従来型の学力観から、知識・技能を実生活に活用する力という学力観に転換していくことが、現在の学校教育に課せられた課題であると考えられる。そしてこの学力を育成する学習指導、教材開発の方法を開発することが急務となってくる。

#### ○「知を活用する力」に着目した教材開発の枠組み

—今、授業実践で何が求められているのか—

「知を活用する力」に着目した教材開発の枠組みは、「活用型の教育」に位置づくものである。一つは学習内容と現実社会・職業（製品・技術）・人間とのつながりを図る教材開発の方法である。学習内容が現実社会・職業（製品・技術）のなかで、また、人間とのつながりのなかで、どのように活用されているかを理解することによって、児童生徒は今行っている学習の意味を把握することができる。このことによって児童生徒の学習意欲は喚起されていく。二つめの方法は「授業のリアルな環境構成」である。これはとかく「ご

っこ遊び」となりやすい授業の空間を生の実社会の空間そのままに環境構成するものである。授業で学習した内容が授業のなかでもそのまま活用されるように、授業自体の環境を仕組んでいく方法である。

○PISA 型読解力の「熟考・評価」を高める教材開発の枠組み

—教材のホリスティックな構成の試み—

中教審教育課程部会の「活用型の教育」として、PISA 型リテラシーをあげることができる。PISA 学習到達度調査 2003 では、特に日本の生徒は「熟考・評価」の能力が低いことが分かった。この研究では、このことを受け「熟考・評価」を高める教材開発の枠組みを開発した。「熟考・評価」の能力は、理解領域よりもむしろ表現領域においてわれることから、理解領域と表現領域をリンクさせた教材構成を提案した。もともと言語活動そのものが「表現」と「理解」というように離れて存在するものではなく表裏一体のものであるからである。また、「熟考・評価」は単に批判的に読む（クリティカル・リーディング）のではなく、テキストと距離を置き鳥瞰的な視点でテキストを構造的に捉える読みが必要である。このためにテキストの他に、サブテキストを用意し、「比較」という認識作業を通すことにした。このことによってテキストのテーマと自己の内面の価値観と照らし合わせながら、真の意味での「熟考・評価」の能力を育成できるようにした。

○「探求型の教育」と情報活用能力の育成

—「調べ学習の枠組み作りを中心として」—

中教審教育課程部会が示した「探求型の教育」の具体的な中身は、「情報活用能力」の育成がこれにあたる。情報活用能力の育成は、学校の授業のなかでは「調べ学習」として具体化できる。しかし、調べ学習に関しては、教師自体もそのノウハウを理解していないのが現状である。特にテーマの設定に関しては、テーマを絞り込むというポイントを理解している教師がいないのが実情である。学校教育においては今後、調べ学習のノウハウを積極的に児童生徒に指導する必要がある。そこで、筆者は「「探求型の教育」と情報活用能力の育成—「調べ学習」の枠組み作りを中心として—」について考察した。

③中期目標との関連性

○【目標 1】初等中等教育政策の中長期的展開を展望しつつ、その企画、立案に資するための理論的・実証的な調査研究を推進する。

教育方法、学校運営、学校評価、教員の資質向上、教職員配置、学校段階間の接続等の初等中等教育政策の在り方について、政策の内容とその期する効果といった観点から、国際的・理論的・実証的な調査研究を推進する。

④今後の研究予定

- 「キー・コンピテンシー」に基づく学習指導法のモデル開発に関する研究
- 知識・情報活用能力を高める「活用型の教育」の枠組みとその実際
- PISA型数学的リテラシーを高める「活用型の教育」の枠組みとその実際

⑤キーワード

- (1) 学習意欲
- (2) 知識・技能を実生活に活用する力
- (3) 社会とのつながりを図る教材開発の枠組みとその実際
- (4) PISA型読解力の教材開発と実際
- (5) 活用型の教育
- (6) 情報活用能力
- (7) 探求型の教育
- (8) ホーリズム（ホリスティック）

⑥本研究の研究報告書

- 学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究－「知を活用する力」の視点を利用して学習意欲を喚起する－（科学研究費補助金基盤研究C研究成果中間報告書）平成18年3月
- 学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究－「活用型・探求型の教育」の教育の教材開発を通して－（科学研究費補助金基盤研究C研究成果最終報告書）平成19年3月

⑦関連する先行研究や参考となる研究等

- 下田好行「日常現実社会、産業、職業・人間と関連した題材・教材開発の試み(1)－児童生徒の学習意欲とホリスティックな視点とのつながりに着目して－」『教材学研究』第17巻、日本教材学会、p83－86、平成18年3月
- 「学習内容と日常現実社会とのつながりを図る教材・単元開発の枠組みと実際－ホリスティックな視点に着目し児童生徒の学習意欲を喚起する－」『関東教育学会紀要』第32号、関東教育学会、p65－76、平成18年10月
- 「PISA型読解力の「熟考・評価」を高める教材開発の実際(1)－「調べ学習」におけるテーマの絞り込みを中心に」『教材学研究』第18巻、日本教材学会、p27－34、平成19年3月